

## 第5回地域福祉専門分科会及び地域福祉計画策定懇話会議事録要旨

日 時	平成26年2月3日（月）午後3時から5時まで
場 所	東大阪市役所1階 多目的ホール
出席者	<p>（分科会委員）新崎委員、江浦委員、田中委員、永見委員、福永委員、藤並委員、松本委員、三星委員、吉田委員          （懇話会委員）奥田委員、高原委員、林委員、坂東委員、村井委員、吉田委員、脇田委員</p> <p>（事務局）植田福祉部次長、田中福祉企画課長、奥野子ども家庭室長、高橋障害者支援室次長、山田高齢介護課長、赤穂総括主幹、大引主査、吉原主任、村井社会福祉協議会ボランティア・市民活動センター所長代理</p>
議 題	1. 第4期地域福祉計画の素案について
議事要旨	<p>○司会          開会のことば          分科会委員11名中8名の委員の出席により、過半数のご出席があるので、会議が有効に成立している。また、本日は1名の市民の方に会議の傍聴をいただいている。</p> <p>（会長）          今回は最終の会議になるので、皆様のご意見や調査、アンケートを踏まえて最終的にご確認いただき、まとめていきたい。</p> <p>現計画の5年間の間に未曾有の東日本大震災が発生したことも踏まえ、今回の計画の中でも、特に災害に特化するだけでなく平時の中での人と人とのつながりということにとっても苦心して作っていただいた</p> <p>この5年間で東大阪市社会福祉協議会（社協）が地域福祉に特化して、地域担当の職員を1名から7名への増員、コミュニティーソーシャルワーカー（CSW）の強化、地域福祉ネットワーク推進会議を立ち上げての専門職の顔の見える関係づくりという取り組みに力を入れてきた。その結果、専門職へのアンケートでもそういった取り組みへの認知度が少しずつ上がってきている。</p> <p>今回の計画では、CSWによる個別支援を豊かにするためのさらなる地域づくりに関わること、社協が地域福祉のネットワークを推進する中核機関として明確に位置付けたことがしっかりと書き込まれた。</p> <p>そういったことを踏まえた総仕上げとして積極的な意見をいただきたい。</p> <p>（事務局）</p>

パブリックコメントで寄せられた意見と市の考え方  
素案の前回からの主な変更点の説明

(委員)

パブリックコメントに寄せられた意見で挙げられた中央環状線の近くに  
住んでおりいつも横断している。私の年齢ならどうにか渡りきることができ  
るが、一般的な高齢者の方は真ん中で止まらないと渡りきれないと私も感じ  
たことがたびたびある。ここの管理は八尾土木事務所なので、歩行者が渡る  
時間を若干でも伸ばしてもらえる話を市から持って行っていただきたい。一  
度では無理かも知れないが、不可能ではないと個人的には思う。

(委員)

その周辺は中央環状線だけでなく近鉄のガードもある。この周辺は民生委  
員や自治会の校区割が複雑に絡み合い、民生委員がない地域もある。周辺の  
校区が一つになって、その辺も考えるべきではないか。

(会長)

この2つの質問は道路ということで、直接この計画で言及するのは難しい  
かもしれないが、事務局の方で何か意見はないか。

(事務局)

1点目の中央環状線、近畿自動車道については、古くから本市の課題にな  
っている。もともとあの道路は大阪府全体の経済を活性化するために、大阪  
市の周辺に輸送を優先としてつくられた道路で、恐らくつくられた当時は周  
りがたんぼばかりだった時代だと思う。現状、居住している人にとっては、  
あそこが一つの谷や川ようになってしまっていて、川の向こうと川のこっ  
ち側という形になってしまっていて、普段生活される方も目の前にある病院にす  
ぐに行けない、渡るところがないという趣旨の意見であった。

かつて別の形でこの件に触れたことがあるが、八尾土木事務所もしくは府  
民としてはここはやはり優先道路であり、スムーズに流通を流すことを重点  
に考えている。そのため、横断する際は中央に広くとっている島で一回休ん  
でいただく、そのための歩行者用信号について最大限配慮するというのが基  
本的な考え方である。ただ、これは府全体や国全体の政策の中での道路行政  
であり、われわれとしては高齢者の方が一気に渡りたいという気持ちも十分  
に理解している。本市でも将来的には交通政策について考える部署をつくる  
構想もあり、今後、人に優しいまちづくりの観点でどのように交通政策を考  
えるかについて福祉部局としても働きかけていきたい。

次の意見については、まさに校区福祉委員や民生委員の方が地域で活躍し  
ている中で行政の勝手な線引きで重複が生じ、後から真ん中に川ができたこ

とによりその左右で交流がなくなってしまうというもの。電車については連立事業という形で川をなくそうという取組をしているが、道路はなかなか難しい。見直せる部分については、地元のご意見を聞きながら、市として検討していきたい。校区の見直しは非常に難しい問題があるが、真摯に受け止めながら検討していきたい。

(委員)

モノレールが瓜生堂のあたりまで延伸される話があるので、その時点ぐらいで考えればいいのではないか。

(委員)

八尾枚方線でも車いすの人が歩道の段差があって通りないと言っていた。また歩道の幅がとても狭く、車も多く通る。なんとかならないものか。

(事務局)

用地買収や道路予算の関係があって難しい面はあるが、順次改良している。地元からも声を挙げていただければ、その辺に目を向けて改良するかどうか検討もできると思う。

(会長)

物理的な面に意見が集中しているが、それ以外の観点からはどうか。

(委員)

小地域ネットワーク活動の実績がずっと上がっているが、24年度はグループ援助活動の回数が減っている。自分たちの地域では、どんどん回数も増えてきていると実感している中でこのデータが少し疑問に思う。

(委員)

社協として取り組んでいるが、今のご指摘に的確なことは把握していない。ただ、個別援助活動が充足したからと言って、グループ援助活動が必要なくなるということは、当然ないと考えている。社協としてもCOW等によるメニューの企画をしながら、取り組みやすい活動を紹介していきたい。

(会長)

地域福祉活動計画でも、グループ支援の充実はしっかりと位置付けていけないといけない。この若干の減少についてはまた、社協のCOWの方々と検討していく必要がある。

(委員)

この計画にあるように、これまでも様々な施策が相当実施されており、本当に感謝している。ただ、こういった情報が十分に行き渡っていないのではないか。私もこれから一人でも多くの人に知らせてあげたい。

私も家族の介護をしているが、一人でも多くの人に介護予防の大切さを知らせてあげたいと思う。

(委員)

先日、新聞に団塊の世代の方の地域デビューという記事があって、興味を持って読んでいた。この計画でもこの世代のことが取り上げられているが、どんな活動があるか、どんな風に活動したらいいか分からないということが壁になっている。こういったことへの対応について、引き続き検討いただきたい。

また、団塊の世代の方々を含めた担い手の育成について書いているが、この世代の方の2025年問題といった課題がある中で、こういった方々が地域の中でどのように活動していくかも地域福祉の充実にかかってくると思う。

校区福祉委員会の活動の核として小地域ネットワーク活動の個別援助、グループ援助の充実、介護予防事業、健康づくり、災害時の体制づくりという点を挙げているのはよかったと思う。

(会長)

計画の体系として立てた3つの大きな柱のうち、2つ目の「地域で発見・相談・支援できる仕組み」というところで専門職や地域の方との協働・連携の重要性が謳われている。その中の「社会と地域がつながる場の提供」という所で、社会的孤立を防ぐために地域の中での総合相談という視点が入った。経済的貧困と社会的孤立の解消を目指す生活困窮者自立支援の観点からも、つながり、支えあうまちというのがポイントになってくる。

3つ目の「地域福祉の心を育む」というところでは、子どもを対象とした地域福祉教育・福祉学習という概念にとどまらず、福祉に対する無関心層をいかになくしていくのが重要。地域型のボランティアセンターという形で地域により近いところでの相談、発信の窓口が今回の目玉になるのではないかな。

(委員)

体の不自由な方々の輸送問題やスパイラルアップの継続的改善、情報のバリアフリーの重要性、従来薄かったユニバーサルデザインの強化が入ったので、非常にうまく手を入れていただいたと考えている。

地域型のボランティアセンターの説明は、図の上ではどの辺になるのか。

(事務局)

ネットワークの図にある(仮称)地域型ボランティアセンターが該当する。地域デビューの話にもあったが、相談を待ってつなぐだけではなく、ボランティアニーズを発見、発掘して、またニーズを創出して、情報発信していくというような状況をつくっていかないといけない。

今まで社協の本庁にしかなかったボランティアセンターを、東・中・西という形で情報収集しながら、なおかつ情報提供していくという施策展開を考えている。

(会長)

ボランティアが増えるような取組が求められる中で、社協の役割がとても大きい。地域の中の困りごとをしっかりとキャッチし、地域密着型のボランティアセンターへつなぐ、ボランティアで対応できず専門職が必要であれば、COWやCSWとして関わっている社協の強みを生かすことが、責任のある中間支援組織としての役割ではないかと強く思う。

では、全5回の会議に関わっていただいて、感じたことや今後の課題、感想などをみなさんからいただきたい。

(委員)

少子高齢化の進行、老年人口の割合の増加は東大阪市だけの問題ではない。冒頭にある将来の都市像としての「夢と活力あふれる元気都市・東大阪」というキャッチフレーズは、これからはボランティアにとっても大事な言葉。コラムにも「ボランティアデビューしませんか」とあるが、「自分が役に立ちたいと思っているが、どういうことをしたらいいかわからない」という方がたくさんおられる。積極的に声かけをする必要があるが、その声かけの場所がちょっと足りないように思う。ボランティアをしたいと思う人を作り上げるということは、これからの課題だと思っているので、これからも協力をお願いしたい。

(委員)

私も高齢者だが、自宅にずっとこもって、目標、希望を何も持たず、デイサービス、介護に行くという形になっていくので、そこにいくまでに、どのようにこの取り組みを周知していくのが課題ではないか。

(委員)

私の仕事場でも年齢に関係なく生活に困っている方の相談を受けているが、一人でそれを何とかしようというのはとても無理なので、地域の方、民生委員、校区福祉委員、自治会の方々、専門職の方、行政の方、みんなで協力して、ネットワークをつくるということが本当に大事だと日々感じてい

る。もっともっとネットワークを広げられるように頑張っていきたいと思っているので、また今後ともよろしくお願ひしたい。

(委員)

この会議や計画のあらゆるところで、社協を取り上げてもらった。本来、社協の存在意義というのは、ここに記載の通りであり、これに向かって、私ども社協マンは進んでいかなければならない。この計画のアクションプランとして私どもが策定する地域福祉活動計画に生かすという意味で、この会議では様々なことを改めて学び、確認できた。社協が地域福祉の中間支援組織として市民の方に本当に認識いただくには、これからの5年間で正念場だと思っている。組織を挙げて、絵に描いた餅にならないように取り組んでいきたい。

(会長)

社協応援団として、厳しいことばかり言って申し訳なかった。しかし、この概念図はまだここに至っていない部分があるかもしれないが、5年後の計画の時には、こういう形でできたと言えるように一緒に取り組んでいきたいと思う。

(委員)

私たちは福祉や障害ということ意識せずに外国人の言葉の支援という活動をしているので、ちょっとついていけなかったところもあったが、全体のネットワークの中で外国人の支援機構という形で、国籍や性別を超えたバリアフリーの推進の意見を入れていただいたことはすごくよかった。

地域のネットワークという大きな枠組で考えるならば、子育て支援や災害時の支援をするコーディネーターといったところにぜひ外国人の方を入れていただけたら、もっと情報も発信できるのではないかと。

また、情報発信の方法についても、外国人の方でも若い方はSNSの使用が私たち以上にとても早く、何かあればすぐにフェイスブックにアップしたり、ラインで情報をつないだりしている。災害の時の情報も様々な言語で流すと正確な情報が伝わるのではないかと。

(会長)

委員には、われわれの福祉だけの視点からは届きにくい方々への視点も入れていきたいという思いもあり入っていただいた。

(委員)

これからの生活をどのように考えていくのかを、多岐にわたる立場から検討できた充実した会だった。東大阪市に住んでいてよかったという方々を一人でも二人でも増やしていく視点が必要だ。

「子どもを中心とした地域づくり」という言葉があるが、子どもたちがこれからも、いつまでもこのまちに住みたい、このまちに貢献したいと思ってもらえるのが地域福祉のゴールの一つではないか。

(委員)

ある地域で民間の方々がコミュニティバスを走らせようという企画を始めているという話を聞いている。山手の方まで取組みが広がればと思う。私が生まれ育った場所が交通の便のいいところだったので、そうでないところの方のご苦勞を日々感じながら、ますます便利なところが広がっていったらと思う。

市立の小中学校、高校などで認知症サポーターを養成して、そのお父さん、お母さんを巻き込んでいきたい。そういうことがないと30代、40代の人にはなかなか行き渡らないと感じている。

(委員)

小地域ネットワークで一人暮らしの方の見守りをしているが、災害時の協力員さんに連絡網をつくったらどうかという話をした。また、大災害時の避難場所としての学校や公園は認知しているが、こういう企業があつてここに避難もできる、というものを作れたらいいなと考えている。

災害時の住民同士や自治会などの連絡報告を受け付けたり、統括したりする部署やその情報を集約するシステムをつくってもらいたい。

(事務局)

地域で連絡網をつくっていただくのは、非常にありがたい。行政がつくれとなると個人情報があるので、本人の情報提供によるネットワークの構築を地域でやっていただけると、地域力の向上につながり、それを行政の職員がフォローしていく形で考えていきたいと思っている。

情報収集については、地域防災計画において市職員の中で情報収集をする班があり、そこに情報が集約される仕組みになっている。また避難所で業務にあたる職員や要援護者の情報を収集する職員が割当てられており、情報収集の仕組みは一定構築している。

(委員)

他市の例で、各町内会の防災訓練で障害者の参加を企画した際に、当初は関心を示したが結局やり方がわからないということで、実施する地域がゼロというのが数年続き、その後、色々努力を重ねて地域力のあるところが手を挙げ出し、今では数自治会が実施している、という所がある。本市においても、これだけ巨大な市なのでもっと大変だが、何とか市民力を上げて、防災

力の向上にもつなげてほしい。

私がここにいる理由としては、福祉の方だけではなく、まちづくり系の人も入れて地域福祉計画を策定しようということにあると思っている。ずいぶん勝手なことを言ったが、最終的にはたくさんのキーワードを入れていただき、私もこれからも頑張らなければならないと感じた。

デンマークの福祉施設を視察したとき、移動距離何分以上の人はその施設は利用できないという形にするなど、福祉施策と地域施策が区別ができないくらいにしっかりと連動されていることに感動したことがある。

また、長年大学にいたが、毎年4月になると何千人という学生が、どこが高齢社会かと思うぐらい入ってくる。彼らは時間さえあればバイトに入っ、時間給 800 円前後で働いている。それはそれで悪くはないが、彼らを地域福祉で地元へ貢献できないものか、と思う。

(委員)

この素案を作るにあたり、事務局の方にはそのご苦勞に対してお礼を申し上げます。

私は去年までCSWをしていて、今回こういう会議に出席する機会を得ることで、これからの私の役割について、従来と目線が違ってきたように思う。これまでは時間と事例に追われて走り回っていて、周囲が見えないことがあったように思うが、ここに一連の資料を見せていただき、皆さんの努力を肌で感じた上で、私が次に何をすべきか、について考える機会になった。

地域にも特性があって、「ボランティアなんておこがましくて・・・」という人が多い。だから、ボランティアって難しいことはやめて、みんなが使える言葉でやりましょう。サロンをするにしても、お茶やお茶菓子を出したりして、ちょっと人に関われる楽しさを分かってもらい、これがボランティアだと思う。ボランティアグループに参加しようなんていうと、みんながちょっと後ろへ引かれるので、私はあまりボランティアという言葉を使わずに、仲良くしましょう、おせっかいなおばちゃんになりましょうということは今後も取組んでいきたい。

(会長)

私もこの分科会では「ボランティア」とか「市民活動」とか言っているが、住民の方々にお話しする時は、「いい意味でのおせっかいさんになりませんか」と語りかけている。「ボランティア」という言葉の敷居が高ければ、「目配り、気配り、心配りができて、ほっとかれへん人を一人でも増やすというのが、地域福祉ですよ」ということを心掛けており、「分かる言葉で話す」というのはいいヒントをいただいた。

(会長)

私は地元で自治会の班長をしているが、回覧なんか読んでないでとか、市政だよりももらっていないという声もある。また、自治会に入っていないければ、市政だよりは届かない。リージョンセンターに行けばいくらでもあるので、そこに行けばいいのだが面倒だから行かないとか、色々な施策があっても全部は通じていない。私はすごくもったいないと思うので、身近なところだけでも、会ったときには言葉でも伝えるようにしている。班長を下りても、この経験を生かして続けていきたいと思う。

用語解説に母子福祉推進委員とあるが、地域の推進員の名簿はうちの会が出している冊子には載っているが、会員でない方はわからない状態。

(会長)

委員会の名簿を専門職が把握していて、相談があった時に相談するという仕組みを作っていく必要がある。

(会長)

この素案を見せていただき、私の思いがいっぱい詰まっていたうれしく思いながら読ませていただいた。

私も福祉の方に目を向けるきっかけになったのが、ボランティア活動からであった。ボランティア活動はボランティアをするだけではなくて、人とのつながりが広がるし、発見がある。今年の夏も車いす体験の勉強もしたし、常設の災害ボランティアについても社協の方に講師に来ていただいた。そこでしてもらった防災クイズを、新年のお食事会で高齢者の方にしたら大好評だった。

そういうふうに色々なところに出ていくのはしんどいが、必ずいい出会いがあり、たくさんの知恵をいただき、それを地域の皆さんに発信して、いつまでも地域に住み続けたい、本当に人に優しい地域でありたい。それを私のボランティアである校区福祉委員会としての思いで続けている。

私たちは愛ガード運動で、子どもたちが安心して学校へ通学し、元気に学校生活を送ることができるように「行ってらっしゃい」という言葉をかける。また、帰る時には、無事にお父さん、お母さんの家に帰れるようにという思いで、「お帰り」という言葉をかける。命の大切さを自分たちで感じ取ってほしいし、信号を守ることで自分の命は自分で守らなければならないということも、子どもたちとの交流を通じて教えていきたい。

このような自分では言葉で表せない文言が、この計画案にはたくさんあったので、本当にうれしい。

(会長)

今、委員ご指摘のように、ボランティア活動をすることはご自身にとってもプラスになるということも、もっと宣伝していかなければならない。

(委員)

私どもの身障協会は、視覚障害、聴覚障害、障害のある子どもさんを持つ親の会、肢体の不自由な方の4部門で構成されている。一般的には障害者団体とひとくくりにされているが、悩み、課題は部門別でまったく違う。協会に入り役員をして初めて、障害の具合が違ったら大変だということが分かった。

以前にアメリカのバークレーの障害者施設を3カ所ほど回る交流会に参加して感じたのは、アメリカでは電車やバスでは、小さな子どもさんでも車いすやつえを使用する人を見ると、自然な形で席を譲ってあげるという認識が非常に進んでいること。それに対し、日本ではやっぱり関わりたくないという様子が見受けられた。その様子を見ると、子どもに対する教育が非常に大事で、そういった教育を授業に入れていくことがこれから本当に大事なと思う。

(会長代理)

皆さん、本当に忙しい中、寄っていただきご検討いただきましたことに深く感謝申し上げたい。社協の会長という立場から私を感じたこと、やっていかなければならないというようなことを申し上げたい。

概念図を見ると、社協は本当に大変な立場だと感じている。社協が皆さんに立ち寄っていただき、色々な話を持ち寄っていただく、それらの意見を踏まえて、安心して地域に持って行っていただくというプラットフォームを担わないといけない。私も過去3年、社会福祉協議会においても色々な改革を行った。これからはどのような形で進めていくかということについて、検討委員会といったものを立ち上げ、皆さんに引き続きご意見を頂きたい。

それぞれの組織や団体の中で様々な角度からされている取り組みの推進や周知、行政への依頼ごとやPRなどについてよりスムーズに連携が取れるようなネットワークを社協として構築していかないといけない。

私が就任している間は、できるだけ皆さん方に耳を傾け、現場にできるだけ向かい、ご意見をお聞きし、社協としてどのような取組みをするかということ、これからはやっていこうと思っているので、今後ともご協力のほどよろしく願いして、私からのお願いとお礼といたしたい。

(会長)

この案が地域福祉専門分科会の最終案として、社会福祉審議会への報告をさせていただくということに承認していただきたいと思うが、いかがか。

(委員全員)

「異議なし」の声

(会長)

今回の素案をブラッシュアップし報告させていただく。今回、修正が必要という意見は出なかったが、軽微な修正については私と事務局で調整するというご一任いただいでよろしいか。

(委員全員)

「異議なし」の声

(会長)

この二点を確認したところで、事務局にお返しする。

(事務局)

今後の予定としては、本日までの議論を踏まえ、2月21日に開催予定の東大阪市社会福祉審議会において新崎会長からご報告していただき、社会福祉審議会として、東大阪市長に意見具申いただくことになる。計画は社会福祉審議会の意見を尊重し、3月末までに市長が決定することになるので、委員の皆さまにはあらためまして報告いたしたい。

昨年5月より、長きにわたりご多忙のところ、当会議へのご出席、また活発なご意見を重ねていただき感謝申し上げます。市としてこの計画を少しでも目に見える形で反映できるよう、取り組んでまいりたい。

閉会